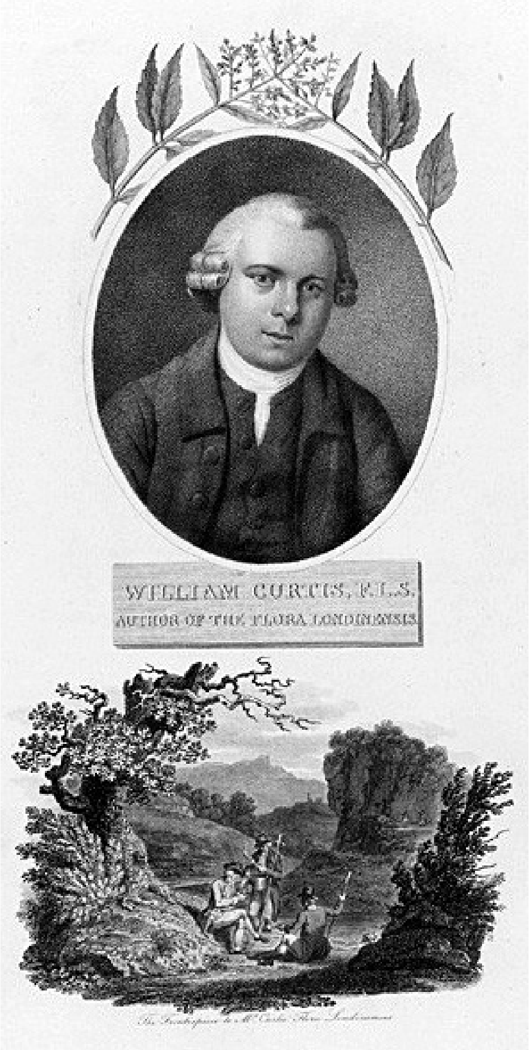
ウィリアム・カーティスの植物園

石倉和佳

1. はじめに

『ボタニカル・マガジン』(*Curtis's Botanical Magazine*)の創刊者として名を残しているウィリアム・カーティス(William Curtis, 1746-1799) の人物とその業績について、現在までまとまった学術的考察はほとんどなされていない。イギリス18世紀の園芸文化や出版文化にとって、カーティスの仕事は重要な影響を与えたものであったが、現代における文化史研究の中で掘り起こされることもないようである。本稿では、カーティスの仕事が同時代の文芸や文化的現象とどのような相互関連を持つものであったかを掘り下げて考察するために、植物書の出版と並行して、彼が運営した植物園とそこに併設されていた植物書専門の図書室、およびカーティスの死後も出版され続けた『ボタニカル・マガジン』について取り上げる。

カーティスの図書室について検討したものは、ノブレット(William Noblett)の論考がほとんど唯一のものである。これは、カーティスの図書室についての情報を網羅的に集め詳細に検討したものである。カーティスの図書室について知るには重要なものであるが、庭園に併設された研究用の図書室としての機能、および同時代文化におけるカーティスの植物園や図書室の意義等についてはほとんど検討されていない。また、図書室に配架された植物書群の分類と評価についても、出版史を踏まえたヨーロッパの植物書のイギリスでの受容



"The Frontispiece to Mr Curtis' *Flora Londinensis*" by William Evans, published by Robert John Thornton, 1 March 1802.

史との比較検討、および18世紀啓蒙主義文化の中での評価などが更に考察されるべきだろう。これらを踏まえて以下では、カーティスの植物園と併設図書館について、カーティスの出版物や同時代人の残した記録などを参照しながら、具体的に見ていきたい[1]。

2. 忘れられたウィリアム・カーティス

園芸と植物学に対するカーティスの精神とその実践に対する理解と深い共感は、カーティス本人を知る同時代の人々が残した伝記類がもっともよく語っている。まず、重要なカーティスの伝記的記述として、彼の知己で医師であり、『フローラの神殿』(*The Temple of Flora*, 1804)[2] を出版したロバート・ジョン・ソーントン(Robert John Thornton, 1768-1837) のものがある。これは、カーティスの死後間もない時期に出されたものとしては、おそらく最もカーティスへの理解を示したものである。その他に、『ジェントルマンズ・マガジン』の記事(1799)、やその他友人たちの回想録がある。そして、カーティスの娘婿で育種家、農園主であったサミュエル・カーティス(Samuel Curtis, 1779-1860) が、『ボタニカル・マガジン』の新シリーズの発刊が始まった1827年に出したものが残されている[3]。しかしこれらの伝記類は、時代を経るとともにほとんど忘れ去られていった。20世紀以降においても、カーティスの著書や関連文書を所蔵する図書館は限られており、全部を閲覧することは困難な状況が続いた。こうした事情がカーティスの研究を阻害するものとなっていたと考えられる[4]。最近ではカーティスの著作は植物図版を含むものまで、ほぼ全てがインターネット上に公開されており、閲覧が格段と容易になっている[5]。

カーティスの最も重要な出版物である『ロンドンの植物』(*Flora Londinensis*、1777-1798, 6vols.) は、フォリオ版の手彩色の植物図鑑であり、購読者を募り300部ほど制作された[6]。この大部の書籍は現在に到るまで、各地の図書館で稀覯本として取り扱われたと考えられるが、必然的に読者の数は非常に少なく、その内容が知られることも稀であった。カーティスがこの書籍にかける思いは非常に強く、一つの花や植物ごとに添えられた念入りな説明は読みごたえのあるものである。そこには、植物をめぐる関心事が農業、土地管理、園芸、食物供給、文学、伝承など様々に繋がって記述されており、現代の目から見ればあらゆる情報が雑多に記載されているようにも思えるが、内容を総括すれば植物をめぐる言説として充実したものだといえるだろう。しかし現代においその植物表象にまつわる文化形成の歴史的意義を追究することはほとんどなされていない。

『ロンドンの植物』は出版事業としては失敗であった。彩色画の制作にはコストがかかり、また購読者数も増えなかったからである。カーティスはこの書籍の出版のために経済的な打撃を受けることになった。しかし中にはソーントンのように、自分の芸術的野心をカーティスの抱いた植物図鑑の理想に重ねて語るものもいた。彼は『ロンドンの植物』について、「彼[カーティス]の『ロンドンの植物』では、植物の各部分が非常に正確に描かれ、植物の説明はすべてのヨーロッパの開明的な植物学者の中で彼の名声を打ち立てるものだった」(“his [Curtis’s] *Flora Londinensis*, where each part of the plant is so accurately given, and where the descriptions established his fame with all the enlightened botanists of Europe,” Thornton *Sketches*, 22) と述べ、「私たちの帝国のように、正しく、偉大で、高潔なもの、英国に真にふさわしいもの」(“one that was equally just, magnificent, and noble, like our Empire—one truly worthy of the British Nation.” Thornton *Sketches*, 16) である、と絶賛している。フォリオ版の立派な装丁に包まれて、美しいイギリス自生の草花の彩色画がロンドンの植生を描き出すとき、ソーントンの目にはそれはイギリスの繁栄と愛国心を示唆するものとなったのだろう。ソーントン自身も、植物画によるドラマチックな高揚とも言うべき芸術表現を、自らの出版事業で成し遂げようとしていた。

こうした植物と国家への心情の結びつきは、同時代精神の一つとして理解されるべきかもしれないが、いまではこれもその他のロマン主義的言説の中に埋もれてしまっている。

3. カーティスの庭の同時代的意味

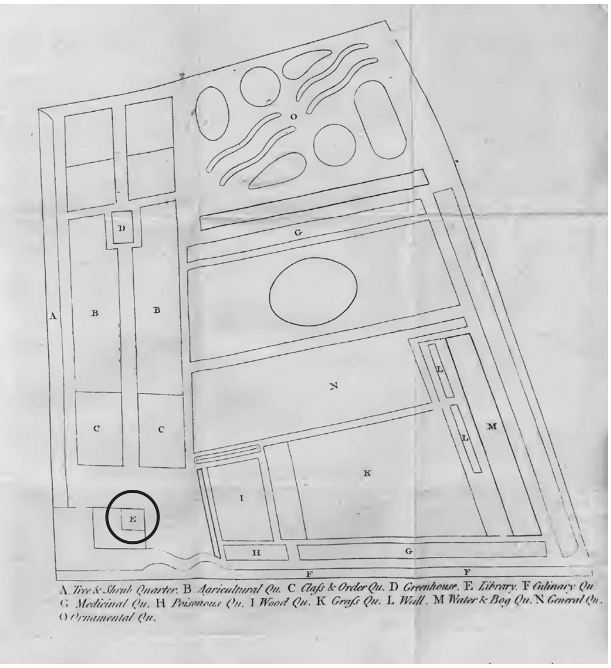
カーティスはロンドンで薬剤師となってから、常に自分の庭を持っていた。各種の植物を育てて、時には種や苗を販売し、同時に人々に開放し、植物を実際に観察するためであった。カーティスにとっての庭は、薬剤師としての仕事と関連したものでもあり、植物を生活の資源として利用する人々の暮らしとも密接したものであった。18世紀、ロンドンにはまだ畑が多く広がっており、牛や羊がいて、人々の食料の多くは近隣の畑で生産されていた。カーティスが人間や家畜の食料になる草木についてもよく研究しているのは、こうした当時の食糧事情が大いに関係している[7]。裕福な人々が庭園を作るその隣では、食料を作るキッチン・ガーデンがあった。経済的な農園運営には、家畜に食ませる草の種類にも研究が必要だった。彼がロンドンに出てきて最初に造った小規模な庭園は、ロンドン橋の南側の地区のグランデ・ロード（Grande Rode）というところにあった。これは、サミュエル・カーティスによれば、植物を種別ごとに区割りして配置した植物園としての体裁を備えたものではなかったようである[8]。カーティスはこの庭に続いて、ランベス（Lambeth）とブロンプトン（Brompton）で植物園を作っているが、それらの庭は、ロンドンの都市化とともに今では跡形も無く消え去っている[9]。

後述するように、カーティスの植物園は会員制であった。会員となったのは、大土地所有者を含む上流の人々や、医師などが多く、カーティスの生前、会員の数は増え200名を越えるようになっていた。会員の中には、上流の人々の妻たちの名も見受けられる[10]。博物学の流行と、植物学がいわゆる「お上品な文化」(‘polite culture’) の一つとして受け入れられたことから、男性のみならず女性も植物への関心を高めていたのである[11]。カーティスの植物園のコミュニティは、上流階級の人々を含む、植物学を中心とした人的つながりによって構成されており、彼らは互いに通信したり、またカーティスから園芸について学んだりしていた。19世紀が進むにつれて、より園芸が大衆化し、ミドル・クラスの人々がポット園芸を楽しむような時代になったときには、カーティスの植物園のような形態は、古い時代を思わせるものとなっていたかもしれない。公共空間としての公園(public park) がロンドンに始めて出現した1830年代には、カーティスの死後移設されたロンドン植物園も、公園に意匠を変えて、元の姿はなくなっている。

それではカーティスの植物園は、特定の時代に出現した、上流文化の名残のようなものなのだろうか。1783年にカーティスが出版した『ロンドン植物園カタログ』(*A Catalogue of the British, Medicinal, Culinary, and Agricultural Plants, Cultivated in the London Botanic Garden*) には、植物の知識の重要性とそれを学ぶことの意義が述べられ、ロンドンの植物、薬草類など種類別に、ロンドン植物園で栽培されている草木のリストが掲載されている。この植物園は、薬学や医学を学ぶ学生たちにとっても有用であり、農園や菜園を営む土地所有者たちにとっても実用につながる知識を学べるところであった。その知識は、図書室で植物分類とともに確認することができた。また、植物園で育てられた植物は手に取ることもできた。季節を知り、植物を観察し、散策し、書物を繰り、訪れた人々同士が会釈し、カーティスが植物の説明をしている―そうした情景をこの植物園の記録からは感じることができる。そのように見ると、今ではすっかり忘れ去られたカーティスの植物園は、異なる階層の人々が植物を通じて交錯する、18世紀後半の文化的な営みの一つの精華であったと考えることができるのである。以下には、カーティスの出版事業と植物園の運営について詳細に見ていきたい。

4. カーティスの出版事業とランベスのロンドン植物園

1775年ごろから、カーティスは『ロンドンの植物』の出版に向けて準備を始めていたが、それからしばらく後の1778年に、テムズ川南岸の西部に広がる、ランベス地区(Lambeth Marsh village) に「ロンドン植物園」(London Botanic Garden) を作り、会員を募ることを公表した。カーティスにとって、ロンドンの植物を網羅する植物彩色画の付きの事典の出版事業と植物園の運営とは、二つの車輪のように切り離せないものであったと考えられる。この植物園は、区画ごとに植えられる植物の種類が決まっており、観賞用、薬用、農業栽培用などに区分けされていた（下図参照）。そしてその庭の一角には図書室が作られていた。1779年から1789年までの10年間、彼はこの植物園を運営した。運営に当たっては多くの人が会員となり支えたようである。この植物園の開園に先立って発行した趣意書（*Proposals*）において、カーティスが特に支援を感謝しているのは、法律家で自然史の研究家でもあったディニーズ・バーリントン(Daines Barrington, 1727-1800) と自然史研究家のトマス・ホルト・ホワイト(Thomas Holt White, 1724-1797) であった[12]。バーリントンは、トマス・ホルトの兄のギルバート・ホワイト(Gilbert White, 1720-1793) の文通相手として知られるが、その書簡の多くは、現代まで読み継がれている『セルボーンの博物誌』(*The Natural History and Antiquities of Selborne*, 1789) に登場している。その他、1783年に発行されたロンドン植物園の植物リストのカタログ（*A Catalogue of the British, Medicinal, Culinary, and Agricultural Plants, Cultivated in the London Botanic Garden.*） によると、40名の会員の中には、元首相でありまた植物学にも造詣が深かったビュート卿（John Stuart, 3rd Earl of Bute,1713-1792）や、王立協会会長になったばかりのジョセフ・バンクス(Joseph Banks, Sir, 1743-1820) の名も見える[13]。



ランベスにあったロンドン植物園の見取り図。図の左下の一角（円で囲んだところ）に図書室の建物があった。右手上側が装飾花壇、左側の真ん中あたりには農業に用いる植物、その上の小さな四角い場所は温室である。Curtis, *A Catalogue,* 70

ランベスで植物園を運営して過ごした時期が、カーティスにとって『ロンドンの植物』の制作に最も熱が入っていた時期であった。『ロンドンの植物』の各植物の説明部分には、文学作品への言及なども散見するが、ランベスのロンドン植物園の『カタログ』にも詩を引用する文学的趣向が見られる。この植物園で栽培されていたロンドンで自生する植物の開花月ごとのリストがあり、ラテン語版と英語版が収録されているが、ラテン語のリストの方には（すなわちより格式高い方、と考えればよいだろうが）、各月の初めにミルトン(John Milton, 1608-1674) やトムソン(James Thomson, 1700-1748) などの詩人による、その月にちなんだ詩の引用が掲載されている。ロンドンに生育する植物のリストを飾るように文学作品を引用することは、みずみずしい草花に自然の美しさを見ることが、人間の言葉が作り出した優れた詩の美しさと対応するものであると示していることでもあるだろう。そしてそれ以上に、植物を知り被造物の美しさを知るといった行為は、自然神学的ともいえる情感を養い、詩を読み観賞することと教養において等値であると

も考えられ、啓蒙主義と矛盾しないイギリス18世紀的な宗教的感情とも通じるものがあると見て取れるのである。

『ロンドンの植物』の出版には、カーティスは心血を注いで取り組んだ。彼自身植物画を描くことが出来たこともあり、細かい描写にも念をいれて画家に指示を出した。先述したように、そうした制作には多額の費用がかかり、次第に購読者の支払う資金だけではまかないきれない事態となり、カーティスは当初の予定どおり編集を続けることができず、1780年代の半ばには編集作業はストップしてしまっていた。この時期の様子を、ソーントンは次のように書いている。

At last all failing, the Flora Londinensis was obliged to move on so slowly, as to merit to be called a stop. Dr. Lettsome[sic], the well-known philanthropist, whose many great acts of private and public beneficence place him nearly at the top of the scale of British worthies, enquiring into the case of this tardiness, unsolicited, remitted to Mr. Curtis, not the loan of a few guineas, with pompous acclamation, but the large sum of Five Hundred Pounds! without any proper security; for Mr. Curtis was then, from his Flora, involved in debt.

(Thornton *Sketches*, 20)

ついにすべてうまく行かなくなり、『ロンドンの植物』は終了したと言われるしかないほどほとんど進行しないような状態を余儀なくされていた。レットソン博士は良く知られた慈善事業家で、彼が私的に、公的に行った偉大な善行は、ほとんど彼をイギリスの名士の最高峰に押し上げるほどである。その彼が、この遅滞が何故起こっているのかを尋ね、請われたわけではなく、また数ギニーを貸すというようなことではなく、大いなる敬意とともに、なんらの担保なしに、5百ポンドもの大金をカーティス氏に送金したのである。というのも当時カーティス氏は、『ロンドンの植物』のために、借金状態に陥っていたからである。

レットソン(John Coakley Lettsom, 1744-1815) は、当時裕福な患者を多く抱える医師であり、また植物学にも造詣が深く、植物園も造営していた[14]。カーティスはクエーカーの家に生まれたが、レットソンも同じクエーカーであり、そうしたこともカーティスへの共鳴に繋がったと考えられる。このエピソードは、当時のクエーカーが植物学の研究分野に深く関係していたことを示すものである。植物学はクエーカーの間で推奨された学問領域でもあり、経済的に成功した人々の中には、レットソンのように庭園造りや植物学をする人々が多くいた。そうしたクエーカーの人々は相互扶助のネットワークを構築していたと考えられる[15]。

レットソンからの送金に加えて、彼の経済的な窮地を救ったのが、1787年に創刊された『ボタニカル・マガジン』(*The Botanical Magazine*)である。これは、海外原産の植物を中心に取り上げた、彩色植物画付きの一般向けの植物雑誌であった。『ロンドンの植物』と違って、1シリングという安価で販売され、当時流行となっていた海外の珍しい園芸品種を多く紹介していた。この雑誌は、すぐに評判となり売れ行きも好調であった。この雑誌の対象とする読者層はミドル・クラスを含む一般の人々だったと考えられる。19世紀にかけて、同種の植物雑誌が次々と発刊されたが、これはその嚆矢を飾るものとなった。なお、『ロンドンの植物』は、カーティス生前の最後の号が1798年に出版されている。

5. カーティスと18世紀の博物学熱

さて、ここまで見てきたところで、同時代のイギリス都市部における文化圏において、カーティスがどのような文脈とともに理解され得たのかについて考えておきたい。カーティスが生涯をかけて目指したものは、現在の目から見ると判然としない趣もある。薬剤を取り扱う職能を見につけることと、18世紀後半の博物誌への関心

とが結びついた先に、おそらくカーティスの場合はルネッサンス期から展開する自然科学(特に植物学)への憧憬があった。ロンドンに出て薬剤師として働き、この職業によって確実に成功することができたにもかかわらず、短い間に資産を作るとその後は博物学の研究に精を出すようになった。彼が最初に本として纏めたのは昆虫(蛾と蝶)についての本である(*Instructions*, 1771)。同時に植物学の研究に精を出すようになり、医術を学ぶ人々に薬草に関する知識をレクチャーすることも始めた。カーティスが自分の庭を持ち始めた頃は、18世紀の博物学熱に取りつかれた成功した薬剤師であった、と言えるかもしれない。

しかし『ロンドンの植物』の出版により負債まで抱えることになった段階においては、カーティスは失敗した出版事業者である。『ボタニカル・マガジン』が成功するまでは、彼は植物園の運営で何とか生計を立てる状況であった。当時自らの収入を博物学や植物学の研究や造園につぎ込む人々の中には、結果的に経済的な損失を背負う場合がしばしばあった。科学研究が制度化しておらず、科学書の出版も植物園の運営も個人や篤志家の力に頼る場合が多かった時代であることを、カーティスの場合も思い起こす必要があるだろう。カーティスに寛大な寄附をしたレットソンは、慈善事業への深入りから、多くの植物愛好家の垂涎の的であった自宅に造った植物園(Grove Hill, Camberwell) を晩年手放すことになった[16]。王家の土地に作られたキュー植物園(Kew Gardens)でさえ、バンクスの死後、植物園の体裁を成さなくなるほど一時期荒れ果ててしまった[17]。

『ジェントルマンズ・マガジン』(*Gentleman's Magazine*) の追想記(1799)は、カーティスの温厚で親切な人柄について語っているが、その仕事ぶりについては必ずしも良い評価を与えていない。この追想記では、カーティスが正しい教育を受けなかったために、手がけたどの分野でも十分な成果を生み出さなかったとして、次のように書かれている。

The mind, untutored, does not know how to fix itself: conscious of great and various powers, it runs from subject to subject, and never pursues any to the limit at which it was enabled to arrive. Thus Mr. Curtis was perpetually forming some new design or other, without completing any one. This versatility must not be imputed to him as a fault; it may rather be called the consequence of (what in his case, and from the circumstances of his family, was unavoidable) an incorrect education. (638)

訓練されていない心は、どのように腰をすえて物事にかかるものかを知らない。大きく多彩な力を持っていることに意識的で、主題から主題へと心は移るが、それが到達しうる限界まで何かを追求することはないのだ。このように、カーティス氏は絶えまなく何らかの新しい構想を次々と練り、何一つ完成させることが無かった。この多才さは、彼の欠点だと非難されるものではない。それはむしろ彼の場合、そしてその家族の状況からして避けられない正しくない教育の帰結である。

ここで正しくない教育とされているのは、クエーカー教徒の子弟の教育機関での学びであると考えられるが、カーティスがクエーカーのアカデミーに通ったかどうかについては確証がない[18]。カーティスは博物学を広く考究するための基礎学問としては不十分なものしか身に付けていなかった、という意味だろうか。少なくとも18世紀の後半において、カーティスはクエーカーの一族として理解されていたと考えられ、彼らのような非国教会徒への偏見も、確かに残っていた時代ではあったのである。カーティスはクエーカーの教会からは離脱していたが、非国教会徒への移動、結婚、職業選択にまつわる法的禁止事項がまだ残っていた時代の気分は、彼を評価する際にも何がしか影響していると考えられる[19]。とはいえカーティスが何一つ最後まで成し遂げなかったと書くのは、カーティスの出版したものや植物園を評

価しない態度である。おそらくカーティスには、その静かで暖かい人柄の内側に、熱情に駆られてわが身の状況を省みず自分の描いたヴィジョンに向かって突き進むようなところがあったのかもしれない。この著者はそうしたカーティスの気質の一面を、それは環境が悪いのである、と嘆いていることになる。

カーティスの植物園に併設されていた図書室の蔵書から彼の知的傾向を推し量るとすれば、それは植物や昆虫の細部へとどこまでも掘り下げようとする、分類学や生物解剖学の細密な世界である。図書室の蔵書は、植物学関係のものを中心として集約的に集められており、これらの書籍はおそらく、カーティスの蔵書に寄贈本や様々な経由でもたらされた書籍が付け加わったものと考えられ、ヨーロッパの本草学書に始まる植物研究の伝統に沿った書籍群となっている。そしてカーティス個人の交流も手伝って、イギリス18世紀の植物学関係図書が特に多いものと見ることができる[20]。

カーティスの植物学はそもそもフィールドワークをはじめとしたものであり、彼の最初の著作が蝶や蛾に関するものであったのも、おそらく戸外での観察が元になっている。彼には自然の中の草花と共存する小動物への関心が基本にあるのである。その自然に意味を与え、知的営みの歴史的な発展の中に自らを置く作業が、カーティスにとっての博物学であった。彼の植物園の運営と彩色図版付きの書籍の出版事業も、そうした文脈から理解をすることができるだろう。

6. ブロンプトン植物園

1789年、ランベスの植物園を運営して10年たった時、フランス革命が勃発し植物園にも変化が訪れた。その頃ランベスの植物園には二つの問題が持ち上がっていた。一つは、場所が分かりにくく植物園に続く道が悪いことと、南風が煤煙を運んでくるために植物の生育が悪くなっていること、という植物園としての不都合さである。もう一つは、植物園の地主が契約更新に際して賃料を釣り上げてきたことである。カーティスは、植物園の不便さや煤煙の被害について綴ったあと、次のように書いている。

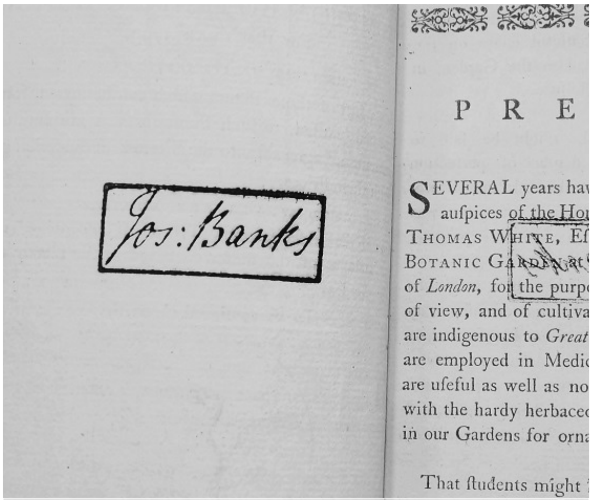
Nevertheless, when I reflected on the sums I had expended, when I surveyed the trees, the shrubs, and the hedges, which I had planted, now become ornamental in themselves, and affording shelter to my plants, such of those inconveniences as I could not have remedied I should have borne with patience, and continued my Garden under all its inconveniences, had not my Landlord exacted terms for the renewal of may lease, too extravagant to be complied with. (*Subscription Catalogue*, 1790, v)

しかしながら、私がこの植物園に費やした費用を鑑みるとき、そして私が植えた木々や茂みや生け垣が、それ自身装飾的と言えるほどいまや育っており、私の植えた植物を保護するものとなっているのを確認する時、私がどうすることもできないそうした不便さは忍耐を持って耐えるべきだったとすれば、そうした不便さの中でもこの庭を続けるべきだったと思われる。もし地主が私の賃貸契約の更新に際してとても折り合いがつかないほど法外な値段を提示することが無ければ。

庭園を移転させるということは並大抵のことではない。育った木々や植物を見てカーティスは情けない思いをしたにちがいない。出版事業の赤字は、『ボタニカル・マガジン』の成功によってその後補てんされたが、ロンドンで初めての試みともいえる、個人による会員制の植物園は、戦争に向かう世情の中で移転を余儀なくされたのである。1790年、カーティスは新たにテムズ川の北側、ブロンプトン地区に植物園を移し、会員を募り始めた。

ブロンプトンはウエストミンスター地区の西部に広がる地域である。カーティスの時代には、まだ空き地が多

くある地域であった。1790年以降、カーティスはこの植物園の会員向けの小冊子、『会員カタログ』(*The Subscription Catalogue of the Brompton Botanic Garden*)を出版しており、本稿で参考にしたものは、大英図書館に所蔵されているものである。『会員カタログ』には、会員となる要件等のほかに、会員リスト、栽培植物リスト、および図書室蔵書リストが記載されている[21]。おおむねロンドン植物園のもの(*A Catalogue*, 1783)と構成や内容的には共通であるが、体裁はより小ぶりで簡易本の印象が強い。ちなみに、大英図書館所蔵のこの『会員カタログ』には、すべてジョセフ・バンクスの蔵書印が押されている。おそらく彼の司書であった誰かが整理していたものだろう。バンクス死後、その膨大な蔵書は大英博物館に寄贈されたが、この小さな会誌もそれらの一つである。



大英図書館所蔵の、ブロンプトン植物園の『会員カタログ』(*Subscription Catalogue,* 1790) バンクスの所蔵印が押されている。

この『会員カタログ』 が残されているため、ブロンプトン植物園については、会員の動向や図書室収蔵の書籍の内容について詳しく知ることができる。会員数は、1790年には121名であったのが、1792年には178名、カーティス死後の1803年には210名となっている。増加の一途を辿っているわけであるが、1790年のカタログにはバンクスを初め、ビュート卿、ディニーズ・バーリントン、サミュエル・グッドイナフ(Samuel Goodenough, 1743-1827)などの支援者に加え多くの貴族の名前があり、こうした上流の人々の存在は、この植物園の魅力を増したと考えられる。また、植物園で生育している草花の種や苗は会員であれば分けてもらうことが出来た。

ソーントンはこの植物園を、「イギリスの楽園」("English Eden," Thornton *Sketches,* 24) と呼んだ。彼によれば、この植物園はハイドパークから1マイル半の西に位置し、入口に「植物園、会員の方々に開園」("BOTANIC GARDEN, OPEN TO SUBSCRIBERS," Thornton *Sketches,* 24) と書かれた場所であり、門番が常駐しており、一歩中に足を踏み入れると花々が美しく咲き誇っている。現在残されているブロンプトン植物園の見取り図とソーントンの紹介から、この植物園の区画の詳細を知ることができる。図にある番号ごとに記述すると以下のようになる[22]。

1)薬草園
2)農耕用(食用)植物
3)外来の草々(イギリスに自生したもの)
4)イギリス自生の草々(ポプラの日陰が覆う)
5)比較的大きく生育するイギリス自生の植物
6)イギリスの木々と灌木
7)草丈の低いイギリス自生の植物(水性植物を含む)
8)温室 (世界各地の気候を模したもの)
9)図書室
10)様々な種類のヒース(heath)
11)球根の花々
12)外来の一年草
13)外来の多年草
14)外来の高山植物

そしてこれらの植物の区画を、外国産の木々が取り囲んでいる。ソーントンの報告は、この植物園が移転して15年ほどたったころであるため、木々も生育し落ち着い

た雰囲気になっていたと考えられる。

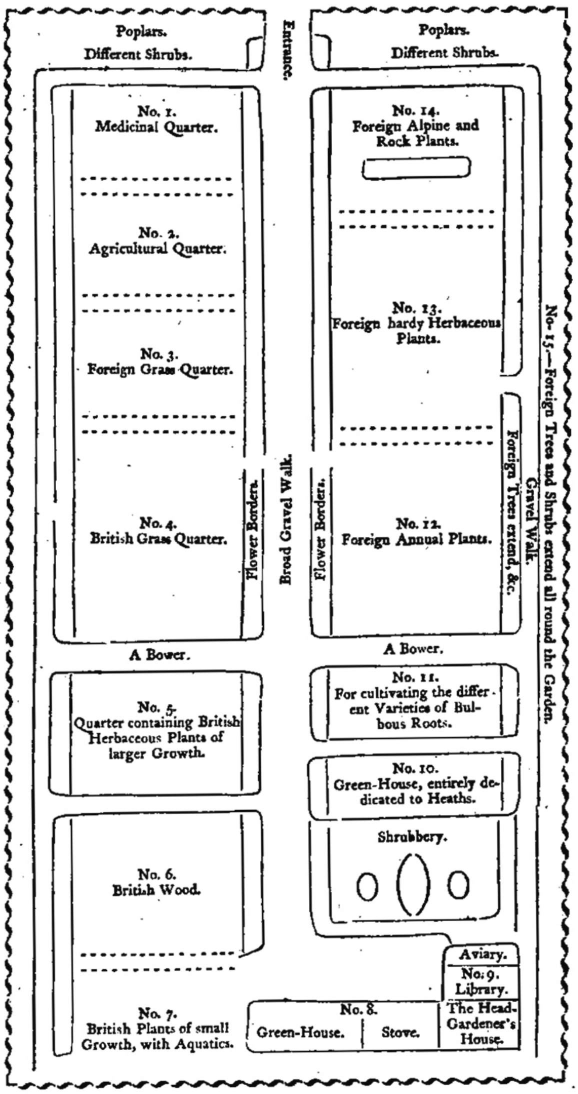
カーティスにとってこの植物園の運営は晩年の時期であり、次第に健康状態が十分でなくなってきたようである。ソーントンは、活力が衰えはじめたカーティスについて、次のように語っている。

The lucrative monthly Botanical Magazine he[Curtis] stuck to, but as a drudgery; the unproductive Flora Loninensis went on like a funeral; he felt his constitution undermined, not by age, but from disappointed expectations; the lecturing and herbarizings he gave up; and the only part of his realized ambition (the Botanical Barden) but brought to his recollection, it was a fugitive wing of a mighty fabric! (Thornton *Sketches*, 30)

よく儲かる『ボタニカル・マガジン』の仕事をカーティスはやり続けたが、それは単調な骨折り仕事だった。儲からない『ロンドンの植物』は消滅へと突き進んでいた。彼は彼自身の本分が傷つけられているように感じた。年齢によってではなく、期待が失望になったことで。講義をするのも植物採集も彼はやめてしまった。そして実現された彼の野心のたった一つの部分（植物園）は、ただ彼の瞑想の中に連れ去られ、彼の庭園は大いなる自然の構造物の移ろいやすい翼であった。

最後の部分が分かりにくいが、日々の手入れを少しでも怠ればすぐにその姿を変えてしまう植物園が、カーティスの死とともに、カーティスの夢の一つとして飛び去ろうとしていた、といったことだろうか。庭でのレクチャーや植物採集を止めてしまったのは、おそらく健康上の理由が大きいと思われるが、『フローラの宮殿』という植物彩色画とセットになった植物書を出版し始めていたソーントンにとっては、ロンドンの植物を網羅して図鑑にしようという計画が、非常に費用のかかる出版事業となって作者を経済的に苦しめるという話は、共感を持ちうるものであったのだろう。ソーントン自身も、『フローラの宮殿』の出版費用の借金で、その後窮乏に陥ること

A PLAN OF THE BOTANIC GARDEN AT BROMPTON.



ブロンプトンの植物園の見取り図。長方形の敷地に、薬草、農業用、外来種、イギリス自生種などに分けて植物が植えられているのが分かる。図書館は図の右下、鳥小屋と庭師の家の間にある。Thornton *Sketches*, 27

になるからである[23]。

7. カーティスの死と植物園のその後

1799年、7月7日、カーティスは亡くなった。先が長くないことを悟っていた彼は、『ボタニカル・マガジン』の原稿を出来るだけ書きため、また遺書も制作していた[24]。

立会人は共同経営者であったウィリアム・ソールズベリ(William Salisbury, d. 1823/1829) であった。ソールズベリはブロンプトン植物園の運営を受け継いだ人物である。ソールズベリとカーティスは旧知の仲というわけではなく、二人は1792年から植物の講義などを通して交流するようになった。その後健康が悪化したカーティスが、ソールズベリと共同経営の形で植物園の運営を行うようになった経緯がある。1805年、ソーントンは植物園がカーティスの計画した通り維持されているのは、ソールズベリの功績が大きいと述べている(Thornton *Sketches*, 30)。ソールズベリがカーティスの作り上げた植物園をその形のまま維持しようと考えた一つは、カーティスに学んだ人物であったこともあるが、植物園の運営は委託されたもので、遺族に利益分を600ポンドになるまで支払う必要があったことも大きい[25]。彼は短期間にそれだけの額を支払ったが、これは利益を上げることができた植物園であったということである。またその後、カーティスの遺産を自分の仕事として発展させるメリットもあったと考えられる。ソールズベリにとって、ブロンプトン植物園の魅力は、その庭園の様々な要素に加えて、多くの上流階級の会員を抱えているという点もあったに違いないからである。庭園文化は長く上流階級によって牽引されてきた経緯もあり、また植物学の研究を行うのは、多くが土地所有者であり、財産と時間の余裕のある裕福な人々であった。庭園造りや薬草の知識などを生かそうとするのであれば、人脈を使って仕事を得るのに勝ることはない。

ソールズベリは、詩人ジョン・キーツ（John Keats, 1795-1821）が薬草についての講義を聞いた人物として文学研究の中で記憶されている。カーティスは見習いの弟子たちとともによく植物採集に出かけていた。ソーントンもそうした彼の聴講生の一人であった。ソールズベリにおいても同じで、薬草学を学ぶ医学生に向けて、植物採集のフィールドワークに出て、実際の植物を目にしながら薬草学を教えていた。そうしたある時に、医学生であった詩人ジョン・キーツもソールズベリの講義を聴講する学生たちの中にいたのである[26]。ソールズベリがキーツを教えたのは1816年であり、そのときソールズベリはガイ病院(Guy’s Hospital)の講師をしていた。カーティスが、ガイ病院と提携していたセント・トーマス病院のジョン・フォーダイス(George Fordyce, 1736-1802) の薬草学の講義の助手をした経験もあったことを考えると、ソールズベリもカーティスの人脈から得たものがあったと推測できるだろう。

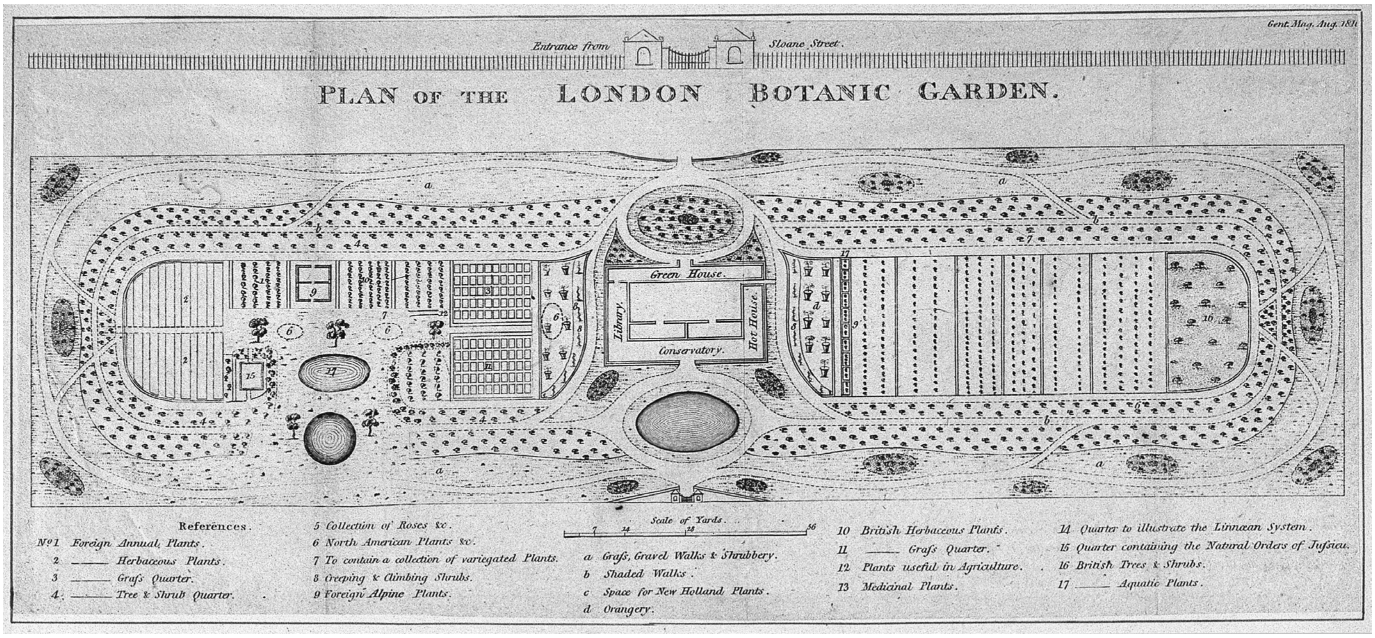
ソールズベリはその後、ブロンプトンの植物園を、より賑わいのある地区に位置するスローン・ストリートに面したカドガン・プレース（Cadogan Place, Sloane Street）に移設した。カドガン・プレースのロンドン植物園は、少なくとも1807年には造成がなされていたようであるが、実際はいつのころから準備されていたのかは定かではない。ソールズベリはこの植物園を、上流の人々の会員を含む市民会員を増やして経営を安定させ、植物や作物についての講演や図書室などの学習環境を整備した学びの場所としたかったようである。サミュエル・カーティスは「より支援者を得ようとして」(“in hope of more patronage,” *Memoirs*, xxviii) 移設したと述べている。

カドガン・プレースの植物園に、ソールズベリがどのようなヴィジョン、もしくは野心を抱いていたかについて、良く伝える文章が残っている[27]。ジョン・アイキン(John Aikin, 1747-1822)が編集した、『アテナ宮殿』(*The Athenæum*) という名称の文芸通信雑誌である。

Mr. Salisbury, of Brompton, is about to form a very extensive Botanical Garden in Sloane-street. He has obtained a piece of ground of considerable extent, in the centre of Cadogan-place, Hans Town: which he means to lay out as a Botanic Garden, of easy access to the public; and to render as interesting as any thing of the kind which at present exists. Besides assembling in one spot, and arranging scientifically, the plants which

the assiduity of botanical travelers has discovered in every different country and climate of the globe, a library of well selected books will be established in the garden: and lectures on botany, as it is connected with medicine and agriculture, and as a branch of Natural History, and general education, will be delivered, during the summer months, by persons properly qualified for the task. Thus, whilst the higher objects of the science are secured, this garden may become a place to which the medical student, the farmer and the artist can occasionally resort to improve their knowledge, elucidate their theories, and deduce new or confirm former principles. Mr. Salisbury intends to keep open and connect with it, the Brompton Botanic Garden, and he invites all persons interested in forwarding his views, to examine that establishment. This establishment has already been honoured with the highest patronage. (*The Athenæum*, vol 2, 1807, 55)

ブロンプトンのソールズベリ氏は、非常に本格的な植物園をスローン通りに造ろうとしている。彼は、人々が訪れやすい場所に植物園を造成するつもりで、ハンスタウンにあるカドガン・プレースの中央にかなりの面積の土地を確保しており、今実在するどのような同種のものよりも興味深いものにしようとしている。この植物園では、植物は一つの場所に集約され科学的に配列されていることに加えて、地球上のあらゆる異なった国や気候の地で、植物を求めて旅する人々の熱心さによって発見されたものが生育し、よく選ばれた書籍のある図書館が設置されるのである。医療と農業に関連したものとして、また自然史の一つの分野として、もしくは一般的な教養を身につけるものとして、十分に資格のある人々によって夏の間は植物学の講義が行われる。このように、この科学の分野の最も重要な目的は保証される一方で、この庭園は医学生や、農業従事者、技術者らが彼らの知識を向上させ、彼らの理論を説明し、新しい原理を引き出したり古いものを確認したりするために時折立ち寄る場所となるだろう。ソールズベリ氏は、ブロンプトン



"Plan of the London Botanic Garden" *Gentleman's Magazine,* 18th August, 1810, pp113-114.

植物園の開園は継続し、新しい植物園とつながったものとし、この施設について検討するために、あらゆる人々の意見を求めている。この施設[ブロンプトン植物園]は、すでに最も高尚な人々の庇護を受けてきている。

この内容からは、ソールズベリの計画が、カーティスが植物園を運営してきた方針からは外れた方向に向かっていることが読みとれる。カーティスは『ロンドンの植物』を執筆するのと並行して、自分の庭でイギリス自生の植物を多く栽培した。ソールズベリの文章からは、プラントハンターが世界中から持ち帰った珍しい植物もここで見られる、といったように読みとれるが、こうした世界各地の植物への関心は当時の時流に乗ったものではあっても、カーティスの求めた植物園の当初の趣旨とは異なっている。『ボタニカル・マガジン』では世界各地の珍しく美しい花々を取り上げたが、カーティスはロンドンや広くはイングランド全土に自生する植物や花々を網羅した辞典を完成したいと願っていたのである。19世紀初頭、戦争によるナショナリズムの高揚により、プラントハンティングの対象となる地域の多くは植民地的関心と共に理解されるようになっていたと考えられるが、そうした時代の変化もカドガン・プレースの植物園の趣旨に反映されているとみて良いだろう。

ソールズベリは、植物学についての講義や図書館といった、カーティスがこつこつと活動し、また蒐集して作り上げたものを、流行に乗った植物園を運営するための重要な特色として前に出そうとしている。この記事が出てから3年後の1810年に、彼は『ジェントルマンズ・マガジン』(*Gentleman's Magazine*) 紙上に、カーティスのブロンプトン植物園の経緯と、カドガン・プレースの植物園の会員を募る旨の情報を掲載した[28]。その際には、美しく描かれた植物園の地図も掲載した(前頁)。この見取り図の中には、図書館が中央部分の左側に描かれ、その図書館を含む四角い建物は温室となっている。カーティスのデザインしたブロンプトン植物園でも、図書館と温室の位置は近かったが、カドガン・プレースの植物園は、その目玉として温室に咲く異国の花々とルネッサンス期以降の植物学の重要書籍の閲覧がセットになって提示されている。裕福な人々の余暇の愉みとしての植物学を演出した庭の設計である。今回の調査ではソールズベリの『ジェントルマンズ・マガジン』の記事以外この植物園の会誌などは発見できず、詳細を伝える資料もなかったため、これ以上のことは良く分からない。この植物園が発表された図面の通りに造られたかどうかは不明であるが、ともかく1820年ごろまでは存在していた。その後一般に開放された庭となり現在に至っている。ソールズベリがカーティスから譲り受けた書籍群がその後どうなったのか、詳細は全く分からないが、その後植物園の運営者が変わる際に散逸した可能性が高い[29]。

8. カーティスとエラズマス・ダーウイン

カーティスの観察眼をソーントンは「顕微鏡的」(“microscopic,” Thornton 30) と呼んだ。草花のどのような小さな特徴でも、カーティスは見逃さなかった。見えるものを見えるまま受け入れて観察すること、そしてそのように自然の中で見つけたものを、自然に対して真摯な態度で検討すること、そして古くからの碩学たちが本草学や植物学の書籍に残した記載と照らし合わせながら、分類し、植物の体系を描いていくこ—これらは、カーティスが生涯行っていたことである。そして、カーティスは彼の時代を席巻したリンネ分類学に対しても一定の距離を置いていた。リンネ分類のようなおしべとめしべの数によって植物を分ける人為分類法以外にも、フランスのトゥルヌフォール(Joseph Pitton de Tournefort、1656-1708)の花の形による分類法や、複数の形質を分類基準とするA.L. ジュシュー(Antoine-Laurent de Jussieu, 1748-1836)の自然分類法など様々な分類法が提示されてきていた。カーティスの植物分類の表記

の特徴は、先人の行った分類表記を出来るだけ多く忠実に記載していることである。つまり、カーティスはあらゆる分類法の表記を採用し、どの分類法が最も良いかといった解釈をしていない。また、分類法を作り出す側でもない。

このようなカーティスの態度は、一見消極的に見えるが、植物分類法の発展史を考えるとあながち意義の少ないものとはいえない。18世紀の初めにはトゥルヌフォールの分類法が広く受け入れられるようになっていた。これは花の形状によって分類するために人為分類とも考えられるが、草木を分け、植物の全体からとらえるところは自然分類の要素も含んでいる。リンネ分類は植物の分類の根拠をおしべとめしべの数に一元化して捉えるものであり、人為分類を徹底させているといえるが、それだけに簡潔明瞭で理解しやすいものでもある。とはいえ、ヨーロッパの人々にはほとんどなじみのないオーストラリアやアジア地域の植物が知られるようになり、また実際に国内もたらされるようになると、リンネの方法は次第に分類法としては役にたたないものとなっていった。1820年代には、すでにジュシューの自然分類法を発展させる方向が、植物分類の主流となった。このように見てくると、カーティスの植物分類表記の態度は、むしろ有益な態度である。リンネの人為分類法のみを受け入れるのではなく、古くからの分類法である自然分類法とその発展形についても視野に入れているからである。このように考えれば、カーティスの態度は17世紀から19世紀への植物分類の発展史を静かに教えてくれているものとも考えられるのである。これはおそらく、いかに分類するかよりも、顕微鏡を覗くように自然の草花を細密に観察すること、すなわち自然と細部に至るまで対話することが、カーティスの植物学の要諦であったからだと考えられる。

さて、ジョセフ・バンクスが王立協会会長を務める間（1778-1820）に、リンネ分類学はイギリスでは主流の分類法となり、その他の分類法は受け入れられない傾向が続いた。バンクスとエンデバー号でオーストラリアまで航海したダニエル・ソランダー(Daniel Solander, 1733-1782) はリンネの弟子であり、その他多くのリンネの弟子たちがバンクスとの交流を持っていた。植物学を嗜むことが一種の流行となり、次々と植物書が出版され、リンネ分類法で記述された植物書が一時期は席巻することになる[30]。18世紀後半、植物学を目指すとすればまずはリンネ分類を、というのがイギリスでは一般的であったのである。

こうした時代を代表するのがエラズマス・ダーウィン(Erasmus Darwin, 1731-1802)である。ダーウィンの著作やリンネの翻訳は、カーティスのブロンプトン植物園の『会員カタログ』（1790）に記載がある。『植物の園』(*The Botanic Garden*, 1789) に加えて、リンネの『植物の種』の翻訳（*A System of Vegetables*, 1782) と、『植物の属』の翻訳（*The Families of Plants*, 1787)である。カーティスとダーウィンは親しい間柄ではなかったが、交流はあったようで、ダーウィンから受け取った書簡が残されている。ダーウィンは、イギリス中西部のリッチフィールドの植物協会(The Botanical Society at Litchfield)の仕事として出版した『植物の種』について、出版の前年の1781年に印刷原稿の見本を送り、その中でカーティスに意見を求め、次のように自著の広告を頼んでいる。

> You [Curtis] would oblige us, if agreeable to you, if you would direct an advertisement of our work [A System of Vegetables] (which we would send you for that purpose) to be stich'd with your numbers; and, if agreeable to you, our society [the Botanical Society] will stitch an advertisement of your work (such as you shall please to send us), in our numbers; hoping to be of reciprocal advantage to each other. (Darwin, 197)

もし君にとって良いことならば、もし君が我々の本の宣伝を君の出版物に差し込むように指示してくれるの

であれば、とても感謝するのだけれど。そして、これももし君にとってよいことならば、私たちの協会は君の本（私たちに送って喜ばせてくれたような）の宣伝を私たちの発行物に差し挟むことにしよう。お互いに相互の利益になることを願って。

ダーウィンはおそらく、カーティスが分冊で発行していた『ロンドンの植物』を手にしていたのだろう。それが、賛助会員たちの寄附で賄われているものであるということを知っていたかどうかは分からない。『ロンドンの植物』は絵画的完成度が高く、彩色画が並ぶページのどこかにダーウィンの本の広告を載せるということはほとんど考えにくいが、ダーウィンは相手のことなど忖度せずに、自身の本の売り上げを伸ばすことに腐心しているようである。また、ダーウィンは『植物の種』にバンクスへの謝辞を掲載している。いささか穿った見方であるが、本の売り上げという事で言えば、バンクスの名前も権威づけには大いに役立つものであったと考えられ、そのバンクスが援助している出版事業であった『ロンドンの植物』に自分も関係することで、バンクスとの関係を密にしたいとどこかで願っていたのかもしれない。

ダーウィンは筋金入りのリンネ信奉者であった。ただし彼は植物を育てることや実際に観察することを何よりも重要なこととは考えていなかったようである。ダーウィンの関心は科学研究や文芸活動に加えて世俗的な成功であり、それは次のような手紙にも現れている。

I have just got Curtis's botanical magazine and can not but wish the characters of the plants were translated in the concise English of the translation of the families of Plants and System of Vegetables publish'd by our Lichfield society: which language is so near the original, and had Dr. Johnson's assistance in the settling of it. I am certain it would double or quandruple the sale of Mr. Curtis's magazine.（To John C. Lettsom, Oct. 8, 1787; 295）

ちょうどカーティスのボタニカル・マガジンを受け取ったところだが、私たちの『植物の属』に用いた簡潔な英語の翻訳語によって、植物の特徴が翻訳されていたならば、と思わずにはいられない。私たちの翻訳は原典に近いものだし、翻訳語を決めるためにジョンソン博士の助けを得ている。私たちの簡潔な英語訳によって、カーティス氏の雑誌は倍にも四倍にも売り上げを伸ばすだろうことを私は確信している。

ダーウィンが自分たちの訳した英語に翻訳されていればよかったと考えているのは、カーティスがリンネの『植物の種』からラテン語の植物の記述や名を取ったところと考えられる。それでは実際はどのようなものであったのだろうか。例として1787年に発行された、すなわちダーウィンが手に取った号の冒頭にある、アヤメ科の植物を取り上げたい。この植物には、リンネの学名および説明が記載されているが("IRIS Persica corolla imberbi petalis interioribus brevissimis patentissimis Linn. *Syst. Vegetab*.")、同時にフィリップ・ミラー(Philip Miller, 1691-1771)の分類も利用しており、ミラーはリンネとは違う名称を採用している（"XIPHIUM Persicum, Miller *Dic*. Ed.6"）。その他カーティスは、16、17世紀の植物学者である、モリソン（Robert Morison, 1620-1683)やパーキンソン（John Parkinson, 1567-1650）からも引いている。このように複数の原典から個別の植物の記述を抜き出し、不同があったとしても併記するのが、カーティスの手法である。

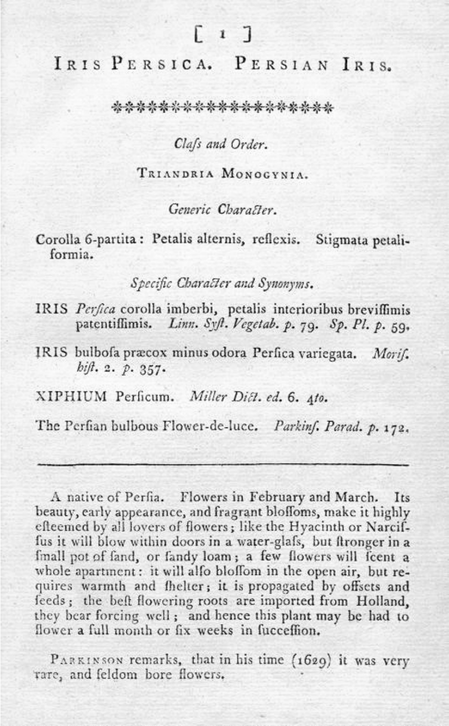
『植物の種』の英語訳を利用して翻訳されていたら、というダーウィンのコメントは、ミラー、モリス、パーキンソンなど本草学から植物学の研究の伝統を作った人々の記述をすべて消去し、リンネの分類法のみを使って記述すればよい、ということに他ならない。ダーウィンの

こういった考え方は、過去より現在の方が必ず優れているといった進歩史観さえも感じられるが、それが当時現代的な思考であったとしても、植物の多様さの前で分類することに必ず付きまとう曖昧さに対して真摯な態度を取っているとは言い難い。ダーウシンはジョンソン博士(Samuel Johnson, 1709-1784) の名前を出しているが、彼が逝去する前にラテン語についての相談をしていたようである。植物学書を出版するにはバンクスの権威が有効とすれば、ラテン語の翻訳にはジョンソン博士、という事であろうか。植物学を嗜む人々のすそ野が広がっていたこの時代、ラテン語での記述よりも英語での記述が望まれる向きもあった。カーティスがそのような出版事情を気にしていたかどうかは不明である。

総じて見れば、ダーウィンの『ボタニカル・マガジン』に対するこの書簡に見られるコメントは、カーティスの新しい出版事業にいささか色めき立った反応を示しているものと考えられる。実際に、『ボタニカル・マガジン』が発刊されたすぐ後の1790年に、スミス(James Edward Smith, 1759-1828) とサワビー(James Sowerby, 1757-1822) による、同種の植物雑誌である『英国の植物』(*English Botany*) の発刊が始まっている。サワビーはかつてカーティスの所で『ロンドンの植物』の彩色画を描いていた画家であった。植物画を描くことが独立した職業となりえる時代が始まろうとしていた。カーティスの植物雑誌発刊の事業も、その後多くの追随者を出すことになる。

9.『ボタニカル・マガジン』のその後

カーティスが生前、非常に気にかけていたことは『ボタニカル・マガジン』をどのように継続していくかという事であった。そのため遺言には、この雑誌について詳細に記述されている。カーティスは、出版事業者として弟のトーマス（Thomas Curtis, 1749-?）、そして編集者として友人で医者であったジョン・シムズ(John Sims, 1749-1831) の名をあげた。1800年に出版された14号が、カーティス生前の最後の号であるが、翌年に15号



[1]

IRIS PERSICA. PERSIAN IRIS.

Claſs and Order.

TRIANDRIA MONOGYNIA.

Generic Character.

Corolla 6-partita: Petalis alternis, reflexis. Stigmata petaliformia.

Specific Character and Synonyms.

IRIS *Perſica* corolla imberbi, petalis interioribus breviſſimis patentiſſimis. *Linn. Syſt. Vegetab. p. 79. Sp. Pl. p. 59.*

IRIS bulboſa præcox minus odora Perſica variegata. *Moriſ. hiſt. 2. p. 357.*

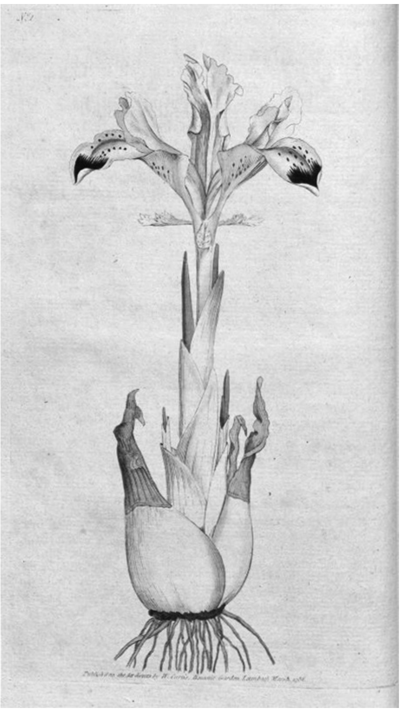
XIPHIUM Perſicum. *Miller Dict. ed. 6. 4to.*

The Perſian bulbous Flower-de-luce. *Parkinſ. Parad. p. 172.*

A native of Perſia. Flowers in February and March. Its beauty, early appearance, and fragrant bloſſoms, make it highly eſteemed by all lovers of flowers; like the Hyacinth or Narciſſus it will blow within doors in a water-glaſs, but ſtronger in a ſmall pot of ſand, or ſandy loam; a few flowers will ſcent a whole apartment: it will alſo bloſſom in the open air, but requires warmth and ſhelter; it is propagated by offsets and ſeeds; the beſt flowering roots are imported from Holland, they bear forcing well; and hence this plant may be had to flower a full month or ſix weeks in ſucceſſion.

PARKINSON remarks, that in his time (1629) it was very rare, and ſeldom bore flowers.

Botanical Magazine, vol.1 1787, 1.



Botanical Magazine, vol.1 1787, 1
“Iris Percica. Persian Iris”

がシムズによって滞りなく出版されている。

15号の前文でシムズは編集を引き継いだ事情を述べている。自分は医者であり植物学は趣味としてやってきたこと、であるので編集には多くの植物関係の友人たちからの助けを得たい、といったことである。そして、「『ボタニカル・マガジン』は、カーティス氏自身が作った計画と出来る限り同じものとして今後続けていくつもりである」(“The Botanical magazine will continue to be carried on as much as possible on the same plan as by Mr. CURTIS himself.” Preface, *Botanical Magazine*, 1801)、とシムズは明言した。そしてこの言葉通り、『ボタニカル・マガジン』は、その編集上の体裁を維持し、1826年まで彼によって編集されることになる[31]。

カーティスの存命中、『ボタニカル・マガジン』は月刊誌として発行され、発行部数は1号あたり初版、再版を含めて5000部に上ることがあった[32]。1号1シリングで販売されていたので、単純に計算しても年に5,000ポンドほどの売り上げである。シムズが引き継いで以来、彩色画への要望がさらに強くなり、1号あたりの植物画の数を増やすことで対応したようであるが、コスト増に比例して販売価格を値上げすることになり、それは発行部数を減少させることにつながったようである。この時期の『ボタニカル・マガジン』で植物画を描いていたのは、シデナム・エドワーズ(Sydenham Edwards, 1768-1819) である。エドワーズは少年時代にカーティスと出会い、カーティスから植物画と植物学の訓練を受けた人物で、1788年から27年間、『ボタニカル・マガジン』の全ての植物画を描いている[33]。『ボタニカル・マガジン』にとって痛手だったのは、1815年、エドワーズが去り、自分自身で『ボタニカル・レジスター』(*Botanical Register*)を発刊し始めたことである[34]。その他、同種の彩色図版入りの雑誌が発刊されたこともあり、シムズが1826年に引退する頃には、発行数は1000部をはるかに下回る有様となっていた。

シムズのあとをうけて、サミュエル・カーティスが『ボタニカル・マガジン』の出版責任者を引き継いだ時、グラスゴー大学の植物学教授であったW. J. フッカー(William Jackson Hooker, Sir. 1785-1865) が編集についた。フッカーは後にキュー植物園の主任監督者となる植物学者である。サミュエル・カーティスとフッカーによって編纂されることになった『ボタニカル・マガジン』は、その後現在に至るまで発刊され続ける植物雑誌として、再生を果たすことになる。サミュエルの娘たちのうち4人は、この雑誌の植物画家として活躍したということである[35]。サミュエル・カーティスは1844年までこの雑誌の責任者をつとめた。フッカーは死の前年の1864年まで編集責任者として活動し、その翌年には息子で同じくグラスゴー大学の植物学教授であったジョセフ・ドルトン(Joseph Dalton Hooker, 1817-1911) が編集を引き継いでいる。

1787年、カーティスが『ボタニカル・マガジン』を創刊した際、彼は序文に次のように書いた。

THE present periodical publication owes its commencement to the repeated solicitations of several Ladies and Gentlemen, Subscribers to the Author's BOTANIC GARDEN, who were frequently lamenting the want of a work, which might enable them, not only to acquire a systematic knowledge of the Foreign Plants growing in their gardens, but which might at the same time afford them the best information respecting their culture—in fact, a work, in which Botany and Gardening (so far as relates to the culture of ornamental Plants) or the labours of LINNÆUS and MILLER, might happily be combined. (*Botanical Magazine*, preface, 1787)

この月刊誌の発刊は、作者の植物園の会員の多くの紳士淑女の方々からのたびたびの懇願によるものである。この人たちは、自分の庭に生えている外国の植物の体系的な知識を得られると同時に、どのように育てたら良いかについての最も正しい情報を与えてくれる

本がない、ということをしばしば嘆いていたのである。つまりそれは、植物学と庭づくりが（それが花壇に植える植物の生育に関係する限りにおいて）、もしくはリンネとミラーの苦心が、うまく組み合わされた書物である。

カーティスの植物園には、『ロンドンの植物』の予約購読者も含まれており、また苗を持って帰る人々もいた。彼らの関心は植物学でもあり、また自分の地所に植物を育てることでもあったのである。植物学と園芸の融合は、『ロンドンの植物』の記述の中にも見られる関心の方向である。カーティスがここでリンネとミラーの名前を出しているのは、その関心の方向を象徴的に示す名前であるからだろう。リンネは学名の命名法を統一し、人為的一元的な分類法を確立したが、このスウェーデンの碩学の叙述は、実際にイギリスで植物を育てる際には助けにならないことも多かったと考えられる。ミラーは、チェルシー植物園の主任として長く植物の生育に関わり、彼の『園芸辞典』（*The Gardener's Dictionary*）は、1731年の初版から、1768年の第8版まで改訂を続け、18世紀のイギリスの園芸書のスタンダードとなった。ミラーの『園芸辞典』には、それぞれの植物の生育および栽培方法、手入れの仕方まで細かく書き込まれている。実際に植物を育てる実践を第一義に捉えるミラーの態度は、カーティスとも通じるものである。

カーティスの示した植物学と園芸の実践との融合は、シムズの編集にも行かされたが、次第に分類法についての問題が深刻になってきた。人為分類法と自然分類法が並列して用いられるようになった結果、同じ植物が複数の属や種によって表記されるような事態も生まれていたからである。カーティスが紹介しようとして出来なかった草花があること、それは例えば喜望峰の近辺から持ち込まれたものであること、そしてそれらの草花は人為分類（リンネ）と自然分類（ジュシュー）では分類が異なってしまうこと—これらの問題をシムズは書き残している[36]。プラントハンターが世界中からもたらす異国の草花の美しさに、多くの人々が魅了されたが、同時にこれらの草花は、これまでの分類では上手くいかないことを、植物学者に強く知らせるものとなっていたのである。

1827年から、サミュエル・カーティスとフッカーによって『ボタニカル・マガジン』の新シリーズが発行された。リンネ分類に基づいたもの、と表紙に書かれており（"their[the most ornamental foreign plans's] names, class, order, generic and specific characters, according to the system of Linnæus" *Botanical Magazine* NS vol.1, 1827 front page）、この表紙の表記は、サミュエル・カーティスが発行責任者であった1844年まで続いた。同時に、サミュエルとフッカーは、1826年以前の旧シリーズの『ボタニカル・マガジン』で取り上げた植物の学術的表記を、自然分類法で再度分類し直したものを1833年に発行した(*Curtis's Botanical Magazine; or Flower Garden Displayed; A New Edition, with Amended Characters of the Species: the Whole arranged according to the Natural Orders*, 1833)。前文によると、この自然分類法はオーギュスタン・ピラミュ・ドゥ・カンドール（Augustin Pyramus de Candolle, 1778-1841）の『植物自然誌体系』（*Prodromus Systematis Naturalis Regni Vegetabilis*、ed. by A. P. de Candolle, 1824-1839）に従ったものであり、フッカーの序文の中には、カンドールに先立って提案されていたジュシューの自然分類法を採用した、ロバート・ブラウン(Robert Brown, 1773-1858) の『オーストラリアの植物史』(*Prodromus Floræ Novæ Hollandiæ*, 1810) へのオマージュが捧げられている(Hooker, preface)。

ウィリアム・カーティスが『ボタニカル・マガジン』の出版を開始した時、イギリスではリンネ分類学の最盛期ともいえる時代であった。その後の分類学の見直しの中で、この雑誌のあり方も変化を遂げた。カーティスが植物学と園芸とを融合させたい、と願った点については、サミュエル・カーティスが、『ボタニカル・マガジン』の園

芸の記述を支えたところに継承されたと考えて良い[37]。サミュエル・カーティスはロンドン近郊のウォルワース(Walworth)で苗木園を運営し、その後エセックス州(Glazenwood, Essex) に大規模な果樹園と庭園を作った。その後、フランス北西部の海洋沖、イギリス海峡に浮かぶ、イギリス領ジャージー島(Jergey)に移住し、南国での庭園造りに残りの生涯を費やした。キュー植物園には、サミュエルの庭園造りのために多くの植物がジャージー島に送られた1840年代後半の記録が残っているとのことである[38]。ブロンプトンの植物園は移設され、ほどなくロンドンから消えてしまったが、カーティスのいとこで娘婿であり、最も良い継承者であったと考えられるサミュエル・カーティスが、ロンドンから遥か遠くの南国で楽園としての植物園を再生したと言えるだろう。サミュエルはジャージー島で81歳で逝去したが、その時園芸雑誌の幾つかに彼の記事が載った。次のものはその一つからの抜粋である。

Here, amid scenes of floricultural beauty, the work of his[Samuel's] own hands, and with a mind intent upon improvement almost to the latest day, glided away in peaceful serenity, and untiring kindness to his poorer neighbours, the last days of this true lover of nature.

(*The Floral World and Garden Guide,* 44)

ここで、花々が美しく咲き誇る情景に囲まれて—この作品は、ほとんど最後のその時まで改良に余念がなかったサミュエル・カーティス自身の手で作り上げられたのだが—平和な静謐と、より貧しい近隣の人々への倦むことのない親切な心のうちに、この真の自然の敬愛者の最後の日々はいつの間にか過ぎ去って行ったのである。

サミュエル・カーティスの作り上げたこの楽園は、彼の死後幾人かの持ち主の手に渡り、第二次世界大戦のドイツ軍の占領期に壊滅的な打撃をうけた。その後自然のままに放置され、復旧計画は進まないまま、現在その美しい姿を再び見せるには至っていない[39]。

(本研究はJSPS科研費　基盤B26284042の助成を受けて行われた。)

---

1 図書室の蔵書については別にリストを作成したが、その具体的書籍群の内容については現在研究中である。

2 これは、*The New Illustration of the Sexual System of Linnaeus* という書籍のシリーズの第三巻である。このシリーズは1797年に購読者を募り始め、1799年から1807年まで出版された。

3 Thornton *Sketches*, "Biographical Anecdotes" *(Gentleman's Magazine*)、Samuel Curtis "Memoirs," がそれらに当る。サミュエル・カーティスの伝記は、本人の事項についても完全に第三者的な語りで記述されているが、これは娘婿でありいとこでもあったサミュエルが、カーティスの業績を客観的に評価するためにこのような語りを採択したのではないかと推測できる。明らかにカーティスを直接良く知る人物の筆になるものであること、サミュエルが幼少期の事項についても、古い知人などから聞き伝えた情報を書いていること、文末に妻でありカーティスの娘であるサラ(Sarah)の死去について情愛をこめて述べられていること、文体の印象がサミュエル・カーティスのHorticultural Society への通信文と似ていること(cf. Samuel Curtis, "An Account")、同じ伝記が、サミュエル・カーティスの著作に再掲載されていること*(General Indexes to the Plants*) から、本稿ではサミュエルの著述として扱う。なお、本稿では『ボタニカル・マガジン』の1827年の書籍版に掲載された伝記を参照しているが、この年の書籍には様々なヴァージョンがあり、おそらくこの伝記が掲載された版はサミュエルの作った私家版ではないかと考えられる。 また、*Gentleman's Magazine* のものは、編者の伝統的ペンネームであるSylvanus Urbanの記事として書かれている。カーティスの死後すぐに出されたものであり、文中にカーティスが自叙伝をシムズに托したとあることから、カーティスに近い人々に取材して書かれたものである。Hugh Curtisはこの著者をSamuel Goodenough としているが、客観的な確証が得られなかったため、本稿では匿名記事として扱う。

[4] 20世紀以降のカーティスの伝記的研究として、1941年に出版された、W. Hugh Curtisによる伝記がほとんど唯一のものである。ただしこれは、ソーントンによる伝記、サミュエル・カーティスの記述、残された書簡などを利用しているが、『ボタニカル・マガジン』などを精査したものではない。

[5] カーティスの著作はGoogle books で閲覧できるものも現在では多く、Biodiversity Heritage Libraryには、*The Botanical Magazine*の第一号から19世紀のものはほとんどすべて、および*Flora Londinensis* の全巻が再録されている。ただし、植物図版には分冊として出版した部分や、私家版もあり、それら各種の版については注意が必要である。

[6]『ロンドンの植物』については、石倉56-60を参照。

[7] イギリスの農園の18世紀の状況については、Campbellを参照にした。

[8] Samuel Curtis, xxi. サミュエルはこの時期、まだ生まれていない頃であるので、おそらく家族の誰か、もしくは園芸仲間の人々から聞き伝えた情報かと考えられる。

[9] カーティスの植物園は、すべて土地の賃貸契約によるものであった。ブロンプトンの植物園の敷地も、カーティスの死後は育種園としてしばらく存在したようであるが、その後のことは分からない。 1827年ごろの状況として"the spot [of Brompton botanic garden] is now part of a nursery ground, with few vestiges of its former state." と、サミュエル・カーティスは書いている（xxviii）。

[10] William Curtis, *The Subscription Catalogue* に会員リストが掲載されている。

[11] 18世紀の女性と園芸文化については、Steir, 特に9-32を参照のこと。

[12] Curtis, *Proposals*, 10.

[13] Curtis, *Proposal*, および *Subscription Catalogue*を参照。ビュート卿およびバンクスは、『ロンドンの植物』の援助者でもある。

[14] レットソンについては、J. F. Payne, and Roy Porter, "Lettsom, John Coakley," *Oxford Dictionary of National Biography* online edition を参考にした。カーティスに500ポンドを送金した時期、彼の年収は1万5千ポンドあったという。

[15] コリンソン（Peter Collinson, 1694-1768)が、アメリカのバートラム親子(John Bartram, 1699-1777; William Bartram, 1739-1823)から送られた、アメリカの植物の種や苗木をイギリスで販売したことが、イギリスにおけるアメリカ原産の木々を増やした、という話は有名なものである。彼らはともにクエーカーであり、コリンソンがアメリカとの布地の取引を多くしていたことから繋がりができたものである。Doublas D. C. Chambers,"Collinson, Peter," *Oxford Dictionary of National Biography* online edition 参照。また、レットソンと同じ医師のフォザギル（John Fothergill,1712-1780）も、コリンソンやレットソンと同様、クエーカーであり、植物学者でもあった。

[16] J. F. Payne, and Roy Porter, "Lettsom, John Coakley," *Oxford Dictionary of National Biography* online edition 参照。

[17] Desmond,125-144参照。1830年代後半、キュー植物園は厳しい予算削減を迫られ、存続の危機に直面していた。

[18] W.Hugh Curtis, 4 参照。オックスフォード州のBurfordというところにあった、Matthew-Huntley Quaker School (Hillside Quaker Academyとも呼ばれる)で学んだかもしれないと指摘されているが、記録は残されていない。

[19] 非国教会徒に対する法的制限の代表的なものは、王政復古とともに制定されたPenal Lawと呼ばれる一連の法律である。クエーカー、ユニテリアン、カトリック教徒など国教会徒でない人々はみな、公職に就くことを禁止され、移動、集会の制限等を受けた。

[20] カーティスの図書室は、科学研究のためと考えるには蔵書の範囲が限定的である。たとえばアリストテレスなどのギリシャの古典や、その他科学一般に関する書籍は含まれていない。ビュフォンの著作に代表されるような、フランスの博物学の書籍もほとんどない。大学で学ぶことなく、見習いに入り、薬剤師として薬草への興味から博物学や植物学へと関心を広げたカーティスにとって、17世紀の王立協会設立の際にとなえられたような、数理的な知的領域も、ほぼ関心の外ではなかったかと推測される。

[21] この図書館の年会費は1ギニーで、2ギニー支払えば、季節の草花が分けてもらえた。図書室蔵書リストは、1790-1792年までの3年間掲載された。

[22] Thornton *Sketches*, 25-27に詳しい説明がある。

[23] Martin Kemp, "Thornton, Robert John" *Oxford Dictionary of National Biography* online edition 参照。ソーントンは作家として活動し続けたが、植物図版本の出版での経済的損失を取り戻すことはできなかった。

[24] W. Hugh Curtis, 112-114 には、遺書の全文がある。.

[25] Samuel Curtis, xxxiii. この支払いには、ブロンプトン植物園の設備全ての利用料が含まれていた。つまり、図書の利用も、ソールズベリが運営に当たるようになってからは、遺族から貸し出されているような形であった。体調不良を感じ、自分の仕事をどのように受け継いでいくべきかを考えていたカーティスは次のように決めたと書かれている。"…for the introduction of him [Salisbury] to the Botanic Garden (more as a

profitable business, than as a learned successor, to support the well-merited fame of its founder) he was associated as the partner of Mr. Curtis, and an agreement was entered into, that on Mr. Curtis's demise, Mr. Salisbury should pay certain annual sums as interest, until he paid six hundred pounds principal money, for the whole establishment as it then stood, with houses, library, &c." (xxvii)

[26] Goellnight, 32. ソールズベリの講義方法は、カーティスに習ったものであることが、次のように述べられている。"Mr. William Salisbury, of the Botanic Garden, Sloane-street, at the recommendation of Drs. Babington and Curry, Richard Ogle, Esq. and other gentlemen, has lately adopted a mode of teaching Botany by making excursions into the fields near London, as was used to be practiced by his late partner, Mr. William Curtis. It having become indispensably necessary for students in medicine to obtain a knowledge of this science, or at least so much of it as relates to an acquaintance with all the plants described in the materia medica, he is desirous of forming a regular establishment in the garden, for the purpose of rendering botanical information."(32)

[27] 筆者の知る限り、ソールズベリについてはキーツ研究での言及があるが、それ以上の関心は向けられていない。キーツ研究においても、彼の運営したロンドン植物園については検討されておらず、同時代の資料が彼の動向を良く伝えるものとなっている。

[28] Salisbury, 113-114参照。

[29] Noblettによれば、カドガン・プレースの植物園は1820年にJames Charles Tateという人物に売却され、教育的な目的を持たない遊歩道のある公園に作り変えられたのち、1840年代にJames H. Tuckに売却された。Noblett は次のように書いている。"Of the Library's fate after Salisbury, nothing is known, although it was probably removed during Tate's reign: a sad end to the carefully chosen collection of that distinguished botanist and educationalist, William Curtis." (22)

[30] ウィザリング(William Withering, 1741-1799)の*A Botanical Arrangement* は、リンネ分類法に基づく一般向け植物辞典として、最も早く出版されよく読まれたものである。

[31] シムズが編集に入った1801年の号から、タイトルがカーティスの名を冠した*Curtis's Botanical Magazine*と変更された。このタイトルはその後も継承されている。本稿では『ボタニカル・マガジン』で統一して表記する。

[32] 『ボタニカル・マガジン』の販売および編集については、Samuel Curtis, xxii-xxivを参考にした。

[33] Raymond B. Davis, Edwards, Sydenham Teast (bap. 1768, d. 1819), *Oxford Dictionary of National Biography,* online edition.

[34] この他に同時代の彩色植物画の雑誌として、ジョージ・ロッディジーズ(George Loddiges, 1786-1846) の発刊した、『ボタニカル・キャビネット』(*The Botanical Cabinet*, 1817-1833)がある。また、1822年には、J. C. ラウドンの『園芸百科』(*An Encyclopaedia of Gardening*) が発行され、これ以後、植物百科事典が多く出版されることになる。

[35] Samuel Curtis Garden Project にサミュエルについての伝記的詳細等が掲載されている。

[36] *The Botanical Magazine*, Preface 1801を参照。シムズは次のように書いている。"In one natural order (the ENSATÆ of Linnæus—IRIDES of Jussieu) such additions have been made to our former stock as to render the nomenclature a mass of confusion." 新種の植物はリンネとジュシューの分類では全く違うようになってしまい、それをこれまでの分類に付け加えていくと、読者にとっては混乱でしかない、という。

[37] 1833年に出版された、自然分類法による*Botanical Magazine* の新シリーズの前文には、"The Letter Press will be conducted by Dr. Hooker, Regius Professor of Botany in the University of Glasgow; with the exception of what regards the cultivation of the species, which will invariably be supplied by Mr. CURTIS."と、サミュエル・カーティスが植物の栽培法等の記述の担当であることが明示されている。Hooker参照。

[38] Samuel Curtis Garden Project 参照。この時のキュー植物園の主任監督者はフッカーである。

[39] サミュエル・カーティスのジャージー島の庭園については、Samuel Curtis Garden Project に詳しいが、この庭園再生プロジェクトは、2004年以降特筆すべき展開を見せていないようである。

＜参考文献＞

Aikin, John(ed.). *The Athenæum, A Magazine of Literary and Miscellaneous Information*. Vol.2 London, 1807.

"Biographical Anecdotes of the late Mr William Curtis." *Gentleman's Magazine*, August, 1799, 635-639.

The British History Online. "Settlement and building: From 1680 to 1865, Hans Town" http://www.british-history.ac.uk/vch/middx/vol12/pp47-51 20170210

Brown, Robert. *Prodromus Florae Novae Hollandiae et Insu lae Van Diemen*. London, 1810.

Campbell, Susan. *Walled Kitchen Gardens*. Oxford: Shire Publication, 2011.

Candolle, Augusting Pyramus de. *Prodromus Systematis Naturalis Regni Vegetabilis.* vol1. Parisii, 1824.

Curtis, Samuel. "An Account of a Lime Duster for the Destruction of Insects on Fruit Trees." *Transactions of the Horticultural Society of London*, Vol.6 (1826), 124-126.

---. *General Indexes to the Plants Contained in the First Fifty-three Volumes of the Botanical Magazine.* London, 1828.

---. "Memoirs of the Life and Writings of the Late Mr. William Curtis." *Curtis's Botanical Magazin*e; *or Flower Garden Displayed.* Conducted by Samuel Curtis. Described by William Jackson Hooker. New. Series; Vol., 1827. 1.v-xxxii.

Curtis, William. *The Botanical Magazine, or Flower-Garden Displayed*. Vol.1-14., 1787-1800. http://www.biodiversitylibrary.org/bibliography/307#/summary

--- *A Catalogue of the British, Medicinal, Culinary, and Agricultural Plants, Cultivated in the London Botanic Garden*. London, 1783.

---. *Curtis's Botanical Magazine.* Vol. 15-146, 1801-1920. http://www.biodiversitylibrary.org/bibliography/706#/summary

---. *Flora Londinensis.* 6vols. London, 1777-1798.

---. *Instructions for Collecting and Preserving Insects; Partic ularly Moths and Butterflies*. London, 1771.

---. *Proposals for Opening by Subscription, a Botanic Garden, to be Called the London Botanic Garden: Designed for the Use of the Physician, the Apothecary, the student in Physic.* London, 1778.

---. *The Subscription Catalogue of the Brompton Botanic Garden.* London, 1790, 1791, 1792, 1793, 1796, 1799, 1800, 1803.

Curtis, W. Hugh. *William Curtis 1746-1799.* Winchester: Warren and Son, 1941.

Darwin, Erasmus. *The Collected Letters of Erasmus Darwin.* Ed. Desmond King-Hele Cambridge: Cambridge University Press, 2007.

Desmond, Ray. *The History of the Royal Botanic Gardens Kew*. 2nd ed. London: Kew Publishing, 2007.

The Floral World and Garden Guide. Vol.3 London, 1860.

Goellnicht, Donald C. *The Poet-Physician: Keats and Medical Science.* Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1984.

Hooker, W. J and Samuel Curtis (eds.) *Curtis's Botanical Magazine; or Flower Garden Displayed*. New Ed. vol.1 London, 1833.

Loudon, J. C. *An Encyclopaedia of Gardening; Comprising the Theory and Practice of Horticulture, Floriculture, Arboriculture and Landscape-Gardening*. 1st ed. London, 1822.

Miller, Philip. *The Gardeners Dictionary. Containing the Methods of Cultivating and Improving the Kitchen, Fruit and Flower Garden, as also the Physick Garden, Wilderness, Conservatory and Vineyard*. Abridged ver. 2vols. London, 1735.

---. *The Gardeners Dictionary: Containing the Best and Newest Methods of Cultivating and Improving the Kitchen, Fruit, Flower Garden and Nursery.* 8th ed. London, 1768.

Noblett, William. "William Curtis's Botanical Library." *The Library*, 6th Series, 9 (1987): 1-22.

Oxford Dictionary of National Biography. Online edition. Oxford: Oxford University Press, 2004-15.

Salisbury, William. "Plan of Mr. Salisbury's Botanic Garden explained." *Gentleman's Magazine*, 29 (1810, August): 113-114.

Shteir, Ann B. *Cultivating Women, Cultivating Science: Flo-*

ra's Daughters and Botany in England 1760-1860. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1996.

Sims, John (ed.) *Curtis's Botanical Magazine; or Flower-Garden Displayed*. Vol 15 London, 1801.

Thornton, Robert John. *New Illustration of the Sexual System of Carolus von Linnaeus :and the Temple of Flora, or Garden of Nature*. London, 1807.

---. *A Sketch of the Life and Writings of the Late Mr. William Curtis*. London, [1806].

White, Gilbert. *The Natural History of Selborne.* Oxford: Oxford University Press, 2013.

Withering, William. *A Botanical Arrangement of All the Vegetables Naturally Growing in Great Britain, According to the System of the Celebrated Linnaeus*. 2vols. London, 1776.

石倉和佳　「ウィリアム・カーティスの『ロンドンの植物』—自然と分類学のあいだ—」　『ガーデン研究会ジャーナル1』2015　53-65

＜図＞

A Layout of the Brompton Botanic Garden in *Gentleman's Magazine*, 29(1810), 113-114 in the Wellcome Library, http:// wellcomelibrary. org/　20170227

＜Web＞

Samuel Curtis Garden Project.
http://www.mnlg.com/curtis/project.html　20170320